

沖縄・亜熱帯島嶼生態系の農業開発

Agricultural development on subtropical island ecosystem in Okinawa

永田 淳嗣^{1*}, 新井祥穂²

NAGATA, Junji^{1*}, ARAI, Sachiko W.²

¹ 東京大学, ² 東京農工大学

¹The University of Tokyo, ²Tokyo University of Agriculture and Technology

沖縄は、第2次世界大戦後27年間にわたりアメリカ軍の施政権下におかれた。この間、沖縄農業に対する政策介入はきわめて限定的であったが、1972年の日本復帰後、一転して政策介入が強化されることとなる。2012年で沖縄は復帰40年を迎える。果たしてこの間、政策は有効に機能し、沖縄農業は望ましい方向に変化してきたと言えるのか。報告者らは、現実が生じている事態に徹底的に向き合う中から、政策と環境と農業変容の間の複雑な関係を読み解き、農業それ自体のあり方や政策介入のあり方に関して有用な示唆を導き出そうと試みた。

本報告では、石垣島の土地改良事業の停滞に対する分析を紹介する。復帰後の沖縄では、灌漑整備を伴う土地改良事業は、糖業・サトウキビ農業の保護と並んで、沖縄農業政策の両輪となった。沖縄本島の南西約400kmに位置する石垣島では、復帰後、国営事業によるダム建設を含む大規模な灌漑整備事業と面整備事業を中心とした土地改良事業が、他の地域に先駆けて実施された。当初この事業は順調な滑り出しをみせたが、次第に、農家から事業への賛意が得にくくなり、事業は計画のおよそ半分まで実施したところで停滞している。なぜあれほどまでに待ち望まれた水をもたらし、効率的な機械作業の実現に結びつくはずの土地改良事業が、農家に受け入れられず停滞することになったのか。報告者らは、農家自身が事業との直接間接の関わりを通じて、面整備された農地や灌漑による水が自らの経営にどのような意味をもつのかを探る中から、いかなる経営の方針を見いだし、それが事業に対するどのような評価やスタンスにつながっているのかを明らかにする作業を試みた。

まず面整備された農地に関しては、確かに条件の悪かった畑では、アクセスが容易になり機械も使えるようになるなどその効果が実感された。しかし政府が面整備事業を推進する背景には、その先に、整然と区画された農地を基盤とする大規模機械化サトウキビ農業の確立という政策目標がある。しかし石垣島のサトウキビ農業の現実が教えるのは、沖縄で安定的な大規模機械化サトウキビ農業を実現することの困難である。収穫期の冬に雨が多く、土壌の粘性も高い沖縄では、効率的に収穫機を動かすには限界がある。

灌漑による水に関しては、どの農家も将来の農業経営の可能性を広げるという点は評価した。しかし、水の問題が突出して重要な課題だと認識したわけではなかった。現実に統計的な数字をみても、灌漑の有無が単位面積あたりの収量の動向を支配する決定的な要因にはなっていない。収量には、全般的な投入の増大、耕作方法の改善、品種の更新等が複合的に影響しており、夏季の乾燥に対しても、品種の選択や作付時期の工夫等によってある程度対処できることを学んでいった。農家の栽培技術の改善の背景にあるこうした理解は、灌漑整備への消極的な態度につながっていったと考えられる。

石垣島の土地改良事業の停滞の分析から、沖縄農業の方向性に対して得られる重要な示唆を簡潔に述べれば、以下のようになる。政府が、沖縄での土地改良事業を通じて目指してきたことは、夏季に頻発する干ばつに対しては大規模な灌漑整備によって対処し、労働生産性の向上という課題に対しては大規模機械化で対処するという、いわば生態環境と社会環境の制約に「重装備の農業」で立ち向かおうというものだった。しかし農家の現実の行動から見えてくるのは、環境が課す様々な制約に対して、真正面から「重装備の農業」で立ち向かおうとするより、「ゲリラ的農業」で対処することの有望性である。「ゲリラ的農業」とは、夏季の乾燥や台風の襲撃を巧みに避け、7月の瞬間値的とも言える気象の好条件を活かすと同時に、均一・均質で整然と区画された大規模農地より、スポット的に存在する好適な土壌を活かそうとする、たとえば、生食用の熱帯果樹生産のような方向性である。誤解がないように言えば、この「ゲリラ的農業」は適切な装備を必要とするそれなりに集約的な農業でありえるし、伝統的な農業への回帰でもない。農家の、試行錯誤を通じた自らを取り巻く環境への認識の深まり、刻々と変化する状況の中での、環境とつきあう新たな知恵の創造の上に見えてくる、新しい農業の方向性を指している。

*本研究には、平成10~13年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)10680077)『都市化・産業化の進展と周辺地域の資源利用に関する東南アジア・日本比較研究』(代表 永田淳嗣)、平成21~23年度文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者養成システム改革加速」(代表 新井祥穂)、平成23~25年度科学研究費補助金(若手研究(B)23720401)『亜熱帯島嶼における環境適応的技術に基づく自律的な地域農業の実現に向けた研究』(代表 新井祥穂)を使用した。

キーワード: 沖縄, 亜熱帯, 島嶼生態系, 農業政策, 土地改良事業, 灌漑

Keywords: Okinawa, subtropical region, island ecosystem, agricultural policy, land improvement project, irrigation